

視点の共有化による共感の形成

— 「かもしれない」の新たな用法をめぐって—

木下りか

武庫川女子大学 文学部

kishita@mukogawa-u.ac.jp

1. はじめに

「かもしれない」で述べられる内容は、1) 真偽不定の場合 (例(1))、2) 真の場合 (例(2) (3))、3) どちらとも解釈可能な場合 (例(4)) とに分けられる。

(1) 明日は晴れるかもしれない。 「認識 (可能性判断)」

(2) 彼は学者かもしれないが、愚鈍だ。 「是認」

(3) (食べてみて) これ、おいしいかも。 「表出的用法」

(4) A: 今日、都合どう? B: 行けないかもしれない。 「認識」 / 「婉曲」

(1)の「認識」の用法において、述べられる内容は蓋然的であるが、(2) (3)の「是認」「表出的用法」においては真であり、可能性判断の意味が失われている。

また、「是認」と「表出的用法」を比較すれば、述べられる内容は次のように異なる。

(5) 「表出的用法」: 感情・感覚、願望など、話者が確言可能・他者が確言不可能な内容

「是認」: 話者が確言可能とは限らない内容

本発表で「表出的用法」という名称を用いるのは、感嘆詞と共に用いることができ、自身の感情・感覚に「かもしれない」を付加しても表出という述べ方が保持されていることによる。

(6) あ!おいしいかも! cf. *あ!彼は学者かもしれないが、愚鈍だ。

「表出的用法」は比較的若い世代が用いる新しい用法であるとされる (平田 2001、国澤 2008, 2013、山岡 2016 など)。本発表は、「是認」と比較しつつ、「表出的用法」の記述を行う。

2. 「表出的用法」とフェイスへの配慮

2.1 フェイスへの配慮—先行研究の記述

(7) 「表明回避」(黄 2006): 「自分の感情や感覚を述べる際に、断定するのを避け、わざと不確かな言い方で、相手に配慮を示す表現」(p. 64)

(8) 「直接証拠的用法」(ワンプラディット 2008): 主張の強さを和らげるヘッジとして機能。

(9) 「拡張した婉曲用法」(国澤 2013): 「相手が異なる意見や認識を持つ可能性があることに配慮」(p. 8) した表現。

(10) 「対人配慮表現 (の一種)」(山岡 2016): FTA を緩和しようとする動機の明示性に年代差がある用法

共通するのは、聞き手のフェイスへの配慮を表すという指摘である。次の(I)(II)に見るように、この特徴はたしかに「表出的用法」に認めることができる(「是認」にも認められる)。

(I) 「表出的用法」と聞き手のフェイスへの配慮

「かもしれない」は、発話行為が受容されない可能性(「Bの発話」の可能性)を認めることで、聞き手のフェイスを脅かさないように、配慮をしていることを表していると考えられる。

(11) A: それかわいいかも! (B: でも私はかわいいと思わない)

(II) 「是認」と聞き手のフェイスへの配慮

「かもしれない」は、二重下線部で示される話者の主張とは異なる主張を「異なる見方」として認めることで、聞き手への配慮を示していると考えられる。

(12) 君は試合に勝ったかもしれないが、実力はまだまだだと思ったほうがいい。(山岡 2016: (8))

(13) 彼は学者かもしれないが、愚鈍だ。

2.2 フェイスへの配慮とは考えにくい場合

(14)も、フェイスの観点から説明可能である。「命題内容が確実であり、相手のフェイスを脅かす可能性が想定できない場合は(中略)「カモシレナイ」は用いられない」(国澤 013: (7))。

(14) (料理を食べて) おいしい { ϕ /??かもしれない}。(国澤 2013: (21))

しかし、(15)では、フェイスを脅かす可能性は考えられないのに「かもしれない」が容認されている。ただし、このときの「かもしれない」は意外性を表していると考えられる。

(15) (新発売の青汁を試飲して) あ!意外とおいしいかも。(ワンプラディット 2008: (2))

(16) 「え～おいしいの?ソースつけた方がおいしいんちゃうん?」

と、疑ってたととろさんですが、お醤油つけたのを食べて、「どうしよう、これおいしいかも・・・」と、気に入ったようです(笑)よかったね、おいしいものが1日で2つも増えて(笑)(新・ムクドリだいありい <http://liepchen.princess.cc/mukudori/?p=1935>)

このとき「食べる前の自分(あまりおいしくない)」「食べた後の自分(おいしい)」とを話者が俯瞰し、どちらも真であるがギャップがあることを認めていると考えられる。フェイスへの配慮を表す(11)~(13)と、(15)(16)との間には、次の共通点が見出せる。

(17) 「表出的用法」「是認」: 発話内容がある視点から見た場合に真であり、別の視点から見ればそれと矛盾する内容が真であると述べる。(話者は二つの矛盾を俯瞰して述べる)

3. 「是認」との相違

3.1 焦点化される視点の相違

前節までの考察から「かもしれない」には次の二種類の主体が関わっていると考えられる。

(18) 概念化者：述べられる内容を構成する主体。(たとえば「おいしいかも!」と言うときの、「おいしい」「おいしくない」を構成する主体)

話者：矛盾する内容を俯瞰して述べる主体

「是認」と「表出的用法」とでは、二種の主体の焦点化の度合いが異なると考えられる。「是認」の場合、矛盾する内容((12)(13)の二重下線部)が文脈として示されている必要があり、この文脈を削除すると意味が変わり、「認識」となったり非文となったりする。つまり「是認」は「概念化者」を焦点化する文脈に支えられている。しかし「表出的用法」はそうではない。

(19) 「是認」：「概念化者」に焦点(矛盾対立が際立つ)

「表出的用法」：話者に焦点

3.2 「表出的用法」における「概念化者」の非焦点化

(19)の相違は、述べられる内容の相違((5))からも必然的に導かれる。「表出的用法(例：おいしいかも!)」の場合、感情・感覚について述べることは、(20)に見るように、「概念化者」の非焦点化を意味し、それが他者との共感形成の表現につながると考えられる。

(20) a. 「概念化者」：「おいしい」という感覚を直接知ることができる感覚主として、他の視点から見て「おいしくない」が真であると述べることを認めない。

b. 「話者」：「おいしい」と「おいしくない」の両方を認める。

⇒二種類の主体が矛盾⇒話者は「概念化者(他者にとって不可侵の存在)」としての自己の存在を消して(客体化して)述べる⇒他者の視点に近づく⇒視点の共有化、ひいては共感の形成へ(本多 pp. 204-205)

一方「是認(例：彼は学者かもしれないが愚鈍だ)の場合、「概念化者」に焦点が当てられる。

(21) a. 「概念化者」：「彼は学者だ」を真と認識するときでも、真偽の決定権を持たず、見方によって「学者ではない」という認識があることを許容する。

b. 「話者」：「彼は学者だ」と「学者ではない」の両方を認める。

⇒二種類の主体は矛盾しない⇒自己は両方の役割を担う。

4. 共感形成の表現

4.1 公的な場における使用の回避

「表出的用法」は「是認」とは異なり、公的な場面では使われず、親しさの表現として機能する。

(22) A：この料理、いかがですか。

B：??とてもおいしいかもしません。／とてもおいしいです。

(23) A：どう？ B：めっちゃ、おいしいかも。

(24) たしかに彼は学者かもませんが、愚鈍です。

4.2 読み手を引き込む効果

「表出的用法」はレシピ、商品、店などを人に紹介する場合のタイトルとして多用される。

(25) 高速バスで広島に行きたいかも (中略) 大好きなもみじまんじゅうを買うために、そして彼の親しい友人に久しぶりに会うために、高速バスを利用して広島旅行を堪能したいです。

(<http://resort-bus.com/2014/08/post-237.html>)

(26) 次回はもっと明るい時間に行きたいかも……………

「ギャラリー ヤスタケ」はお気に入りのカフェです。(中略) でも(写真を撮ろうと思ったのに暗い時間だったので: 引用者補注)、次回は明るい時間に行きたいなあ〜と思って画策しているあけ(名前: 引用者補注)です。(http://akechuchu.exblog.jp/23815038/)

冒頭で使用され読み手を引き込む効果⇒「異なる見方を認める」(「是認」「表出的用法」に共通の意味)だけではなく、話者と他者との対立を消す「表出的用法」ならではの効果ではないか。

5. おわりに

「表出的用法」という新たな用法は、「是認」の用法との間に、「異なる見方を認める」という共通点を持つが、それだけではなく、他者から見れば不可知の自己を消し去ることで他者と共有可能な視点に立って自己の感覚・感情について述べ、それによって共感形成の表現として機能していると考えられる。「かもしれない」のこの意味変化は、広く観察される「間主観性」(Traugott 2010 など)の度合いを高める方向への変化だと考えられる。

主要参考文献

- 木下りか(2016)「認識のモダリティ形式の多義性と認知領域—「認識」から「是認」への意味拡張—」『認知言語学会論文集』第16巻
- 国澤里美(2013)「語用論の観点から見た認識のモダリティ形式「かもしれない」について」『言葉と文化』14 pp. 1-17
- 黄鈺涵(2006)「「かもしれない」の婉曲表現としての機能分類について」『日本語教育研究』51 pp. 59-67
- 平田真美(2001)「「かもしれない」の意味—モダリティと語用論の接点を探る—」『日本語教育』108号 pp. 60-68
- 本多啓(2005)『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会
- 山岡政紀(2016)「「カモシレナイ」における可能性判断と対人配慮」小野正樹・李奇楠編『言語の主観性 認知とポライトネスの接点』くろしお出版 pp. 133-150
- ワンプラディット, アパサラ キク(2008) 可能性を無くした「かもしれない」『京都大学言語学研究』27 pp. 189-202
- Traugott, E. (2010) (Inter)Subjectification and (Inter) subejectification: A Reassessment . *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalizaiton*. Mouton de Gruyter, 29-71.